

# 四條金吾殿御返事

文永九年

五一歳

夫、齊の桓公と申せし王、紫をこのみて服給ひき。楚の莊王と言ひし王は女の腰のふと  
き事をにくみしかば、一切の遊女腰をほそからせんがために餓死しけるものおほし。し  
かれば一人の好む事をば我が心にあはざれども万民随ひしなり。たとへば大風の草木を  
靡か<sup>靡</sup>し、大海の衆流をひくが如し。風にしたがはざる草木はをれうせざるべしや。小  
河大海におさまらずば、いづれのところにおさまるべきや。

国王と申す事は、先生に万人にすぐれて大戒を持ち、天地及び諸神ゆるし給ひぬ。  
其の大戒の功德をもちて、其の住むべき国土を定む。二人三人等を王とせず。地王・天  
王・海王・山王等 悉く来たつてこの人をまぼる。いかにいはんや其の国中の諸民、其  
の大王を背くべしや。此の王はたとい悪逆を犯すとも、一二三度等には左右無く此の大  
王を罰せず。但諸天等の御心に叶はざる者は、一往は天変地天等をもちてこれをいさ  
む。事過分すれば諸天善神等其の国土を捨離し給ふ。若しは此の大王の戒力つき、期来  
たりて国土のほろぶる事もあり、又逆罪多くにかさなれば隣国に破らるゝ事もあり。善  
悪に付けて国は必ず王に随ふものなるべし。

世間此くの如し、仏法も又然なり。仏陀すでに仏法を王法に付し給ふ。しかればたと  
い聖人・賢人なる智者なれども、王にしたがはざれば仏法流布せず。或は後には流布す  
れども始めには必ず大難来たる。迦弍志加王は仏の滅後四百余年の王なり。健陀羅国を  
掌のうちににぎれり。五百の阿羅漢を帰依して婆沙論二百巻をつくらしむ。國中総  
て小乗なり、其の国に大乘弘めがたかりき。発舎密多羅王は五天竺を随へて、仏法を失  
ひ、衆僧の頸をきる。誰の智者も叶はず。太宗は賢王なり。玄奘三蔵を師として法相  
宗を持ち給ひき。誰の臣下かそむきし。此の法相宗は大乘なれども五性各別と申して、  
仏教中のおほきなるわざはひと見えたり。なを外道の邪法にもすぎたる悪法なり。月支  
・震旦・日本三国共にゆるさず。終に日本国にして伝教大師の御手にかゝりて此の邪法  
止め畢んぬ。大なるわざはひなれども太宗これを信仰し給ひしかば、誰の人かこれをそむ  
きし。

真言宗と申すは大日経・金剛頂経・蘇悉地経による。これを大日の三部と号す。玄宗  
皇帝の御時、善無畏三蔵・金剛智三蔵天竺より將ち来たり。玄宗これを尊重し給ふ事、  
天台・華嚴等にもこえたり。法相・三論にも勝れて思し食すが故に、漢土総て大日経は  
法華経に勝るとおもひ、日本国当世にいたるまで天台宗は真言宗に劣るなりとおもふ。  
彼の宗を学する東寺天台の高僧等慢過慢をおこす。但し大日経と法華経とこれをならべ  
て偏党を捨てこれを見れば、大日経は螢火の如く、法華経は明月の如く、真言宗は衆星  
の如く、天台宗は日輪の如し。偏執の者の云はく、汝未だ真言宗の深義を習ひきはめず  
して彼の無尽の科を申す。但し真言宗漢土に渡りて六百余年、日本に弘まりて四百余年、  
此の間の人師の難答あらあらこれをしれり。伝教大師一人此の法門の根源をわきまへ給

ふ。しかるに当世日本国第一の科是なり。勝を以て劣と思ひ劣を以て勝と思ふの故に、大蒙古国を調伏する時、還つて襲はれんと欲する是なり。

華嚴宗と申すは法蔵法師が所立の宗なり。則天皇后の御帰依ありしによりて諸宗肩を並べがたかりき。しかれば王の威勢によりて宗の勝劣はありけり。法に依つて勝劣は無き様なり。たとい深義を得たる論師人師なりといふとも、王法には勝ちがたきゆへに、たまたま勝たんとせし仁は大難にあへり。所謂師子尊者は檀弥羅王のために頸を刎ねらる、提婆菩薩は外道のために殺害せらる。竺の道生は蘇山に流され、法道三蔵は面に火印をされて江南に放たれたり。

而るに日蓮は法華經の行者にもあらず、僧侶の数にも入らず。然して世の人に随つて阿弥陀の名号を持ちしほどに、阿弥陀仏の化身とひゞかせ給ふ善導和尚の云はく「十即十生百即百生乃至千中無一」と。勢至菩薩の化身とあをがれ給ふ法然上人、此の釈を料簡して云はく「末代に念仏の外の法華經等を雜ふる念仏においては千中無一、一向に念仏せば十即十生」云云。日本国の有智・無智仰いで此の義を信じて今に五十余年、一人も疑ひを加へず。唯日蓮の諸人にかはる所は、阿弥陀仏の本願には「唯五逆と誹謗正法とを除く」とちかひ、法華經には「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば、則ち一切世間の仏種を断ず、乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」と説かれたり。此善導・法然謗法の者なれば、たのむところの阿弥陀仏にすてられをはんぬ。余仏余經においては我と抛ちぬる上は救ひ給ふべきに及ばず。法華經の文の如きは無間地獄疑ひなしと云云。而るを日本国はをしなべて彼等が弟子たるあひだ、此の大難まぬがれがたし。無尽の秘計をめぐらして日蓮をあだむ是なり。

前々の諸難はさておき候ひぬ。去ぬる九月十二日御勘氣をかふりて、其の夜のうちに頸をはねらるべきにて候ひしが、いかなる事にやよりけん、彼の夜は延びて此の国に来たりていままで候に、世間にもすてられ、仏法にも捨てられ、天にもとぶらはれず、二途にかけたるすてもものなり。而るを何なる御志にてこれまで御使ひをつかはし、御身には一期の大事たる悲母の御追善第三年の御供養を送りつかはされたる事、両三日はうつゝともおぼへず。彼の法勝寺の修行が、いはをが島にてとしごろつかひける童にあひたりし心地なり。胡国の夷陽公といひしもの、漢土にいけどられて北より南へ出でけるに、飛びちがひける雁を見てなげきけんも、これにはしかじとおぼへたり。但し法華經に云はく「若し善男子善女人、我が滅度の後に能く竊かに一人の為にも法華經の乃至一句を説かん。当に知るべし是の人は則ち如来の使ひ如来の所遣として如来の事を行ずるなり」等云云。法華經を一字一句も唱へ、又人にも語り申さんものは教主釈尊の御使ひなり。然れば日蓮賤しき身なれども教主釈尊の勅宣を頂戴して此の国に来たれり。此を一言もそしらん人々は罪無間を開き、一字一句も供養せん人は無数の仏を供養するにもすぎたりと見えたり。

教主釈尊は一代の教主、一切衆生の導師なり。八万法蔵は皆金言、十二部經は皆真實なり。無量億劫より以来、持ち給ひし不妄語戒の所詮は一切經是なり。いづれも疑ふべ

きにあらず。但し是は総相なり。別してたづぬれば、如来の金口より出来して小乗・大乘・顯・密・権經・実經是あり。今この法華經は、仏「正直捨方便等乃至世尊法久後要当説眞実」と説き給ふ事なれば、誰の人か疑ふべきなれども、多宝如来 証明しょうみやうを加へ、諸仏舌を梵天に付け給ふ。されば此の御經は一部なれども三部なり、一句なれども三句なり。一字なれども三字なり。此の法華經の一字の功德は、釈迦・多宝・十方の諸仏の御功德を一字におさめ給ふ。たとへば如意宝珠のごとし。一珠も百珠も同じき事なり。一珠も無量の宝を雨らす、百珠も又無尽の宝あり。たとへば百草すを抹りて一丸乃至百丸となせり。一丸も百丸も共に病を治する事これをなじ。譬へば大海の一滄も衆流を備へ、一海も万流の味をもてるが如し。

妙法蓮華經と申すは総名なり、二十八品と申すは別名なり。月支と申すは天竺てんじくの総名なり、別しては五天竺是なり。日本と申すは総名なり、別しては六十六州これあり。如意宝珠と申すは釈迦仏の御舍利なり。竜王にこれを給ひて頂上に頂戴して、帝釈是を持ちて宝をふらす。仏の身骨の如意宝珠となれるは、無量劫来持つ所の大戒、身に薰じて骨にそみ染、一切衆生をたすくる珠となるなり。たとへば犬の牙の虎の骨にとく、魚の骨の鷗うの氣いきに消ゆるが如し。乃至師子の筋を琴の絃いとにかけてこれを弾けば、余の一切の獣の筋の絃、皆きらざるにやぶる。仏の説法をば師子吼と申す、乃至法華經は師子吼の第一なり。

仏には三十二相そなはり給ふ。一々の相皆百福莊嚴なり。肉髻にくけい・白毫びやくごうなど申すは菓このみの如し。因位の華の功德等と成りて三十二相を備へ給ふ。乃至無見頂相と申すは、釈迦仏の御身は丈六なり。竹杖ちくじょう外道げどうは釈尊み たけの御長をはからず、御頂を見奉らんとせしに御頂を見たてまつらず。応持菩薩も御頂を見たてまつらず。大梵天王も御頂を見たてまつらず。これはいかなるゆへぞとたづぬれば、父母・師匠お・主君を頂くぎょうを地につけて恭敬し奉りしゆへに此の相を感得せり。

乃至梵音ぼんのんじょう声と申すは仏の第一の相なり。小王・大王・轉輪王等此の相を一分備へたるゆへに、此の王の一言に国も破れ国も治まるなり。宣旨と申すは梵音声の一分なり。万民の万言、一王の一言に及ばず。三墳さんぶん五典ごてんなど申すは小王の御言なり。此の小国を治め乃至大梵天王三界の衆生を随ふる事、仏の大梵天王帝釈等をしたがへ給ふ事もこの梵音声なり。此等の梵音声一切經と成りて一切衆生を利益す。其の中に法華經は釈迦如来の御志を書き顯はして此の音声を文字と成し給ふ。仏の御心はこの文字に備はれり。たとへば種子と苗と草と稻あとはかはれども心はたがはず。釈迦仏と法華經の文字とはかはれども、心は一つなり。然れば法華經の文字を拝見せさせ給ふは、生身の釈迦如来にあひまいらせたりとおぼしめすべし。此の志佐渡国までおくりつかはされたる事すでに釈迦し仏し知めろしおわ食し畢んぬ。実に孝養の詮なり。恐々謹言。

文永九年 月 日

日 蓮 花 押

四条三郎左衛門尉殿御返事